

[巻頭言]

「若い研究者（挑戦する者）の皆さんへ」

東北文化学園大学 医療福祉学部 リハビリテーション学科 視覚機能学専攻

浅野 浩一

どれ位の年齢までを若いというのは別にして、私も気持ちだけはいつも若いつもりでやってきましたが、不本意ながら還暦も迎えましたので、多少のこれまでの経験と想いを後輩の皆さんへ少しお話しさせて頂きたいと思います。

私は、研究や仕事をしている中で、孤独感や孤立感、逆風を感じた時に思い出す言葉があります。それは確か高校受験後の春休みに読んだ吉川英治の小説「宮本武蔵」の最終章のタイトル「水心魚歌」の中の、この小説の最後の文章で、「魚たちは群れる、魚たちは唄い踊る。しかし、彼らには解るまい、そこより何尋も下の静かに澄んだ水の心を」というものであったように思います。研究や仕事をしてゆく時、認めてもらえない、解ってもらえない、本当にこれで良いのか思い悩むことがあります。私などは現在もそうかもしれませんが、皆さんにも、今後そういう状況になることがきっとあると思います。そんな時には、充分に自分自身を省みて、且つ熟考した上で、やはり自分が選んだ道が間違っていないと思えたら、信ずるものは己のみ、迷うことなく先ずはやってみることだと思います。私自身に対する自戒に近くなってきましたが、年々その一步が踏み出しにくくなってきています。失敗を恐れてばかりいる訳でもないのですが、よく言うところの慎重である、準備を怠っていない、悪く言えば、打算的になっているのも一つの原因ではないか？自問は限りなく、自責の念もこめて続けますと。世の風潮として、盛んに「産学連携」などと、聞こえは良いですが、言い換えたり、別の角度から見たりすると、お金にならないことは必要ない、無駄であると言っているようにも聞こえるのは私だけでしょうか。また、流行のテーマに我先に飛びつく輩も大変多く、これを錦の御旗のように崇める者までいる。しかし、いみじくも今年度の本邦のノーベル賞受賞者は「役に立つかどうかなんて判らなかったし、考えもしなかった。只々この研究が好きだったので、続けてきただけ」と言い切っておられました。この損得勘定も、周りの目も気にしない、純粋な「知的好奇心」こそが、すべての研究のスタートでもありながら、尽き詰めてゆくと、最後までこれが一番大切なのだと改めて思い知らされた気持ちでした。それ位没頭しないと、道は開けて来なかったり、辿り着かない部分は確かに有ると思っています。良い意味での〇〇オタク、〇〇マニア、〇〇バカになって下さい。何と呼ばれようが、何も掴んでない者より何倍も良いし、未だ掴んでいなくとも、腹が据わっているだけでも良いと思います。言い換えれば、「覚悟」とも言えるかもしれませんが。その昔、侍が命を懸けて斬り合いに臨む時、相手への尊崇の念も込めて発した言葉でもあります。侍でなくとも「覚悟」を持ってことに当たれば、開けて来ない道はないでしょう。本邦の医療・医学の発展の為に、引いては後に続く後輩の為に、そして何よりも必要とされている患者さんや利用者さんの為に、どうか純粋な「知的好奇心」と「覚悟」を持って、日々精進されることを切に願っております。